HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	精神薄弱児の職場開拓に関する調査研究
Author(s)	末岡, 一伯
Citation	北海道大學教育學部紀要, 10, 105-108
Issue Date	1964-06
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/29012
Type	departmental bulletin paper
File Information	10_P105-108.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

精神薄弱児の職場開拓に関する調査研究

末　岡　一　伯

精神薄弱を職場に送り込むことは，精薄教育の仕上げであり，それだけに，精薄が社会的に生産に参加し，よき社会人としての生活を確保できる職場を，できるだけ，多種類にわたり準備しておくことは，重要な問題となる。正常児対象の一般普通教育でも，社会人となった場合の予想が働いているには違いないが，精薄教育の場合には，これが直接的な目標として，特に強く意識されて教育指導が行なわれている。精薄教育が，教科指導よりも生活指導に重点が向けられていることからも，このことは察知できよう。精薄教育の仕上げの場としての職場を開拓し確保することの重要性は，ここにみられる。戦後一特にこの5年位前から一精薄教育の拡充は，かなりの上昇曲線を描いてすすめられ，北海道においても，養護学校をはじめ，中学校の特殊学級の卒業生は年を逐うて増加の一路を辿っている。また，札幌市では特殊教育連盟関係者が，職業安定所や北大，学大と一緒になって，特殊教育就職対策協議会を昭和38年正月に発足させている。しかし，未だ，具体的な就職開拓は，親や担任教師が，種々の個人的縁故や情報を手がかりとして，なされるのが大部分というのが，目下の実情である。

私の今回の調査研究は，地域を札幌市に限定し，この札幌市内に，精薄教育義務を修了したものが就職し得て，しかも望ましい社会生活を将来に亘っても持続し得るような職場が，どれ程実際に存するかを明らかにし，この結果を一つのリストにして，積極的に適当な職場に精薄を送り込み得る準備態勢を調えんとしたものである。

調　査　方　法

調査地域として，札幌市全体を対象にえらんだ。

手順として，先ず札幌職業安定所調査課がつくって保存している事業所の調査表（カード）を手がかりとした。（この事業所数は，昭和38年7月31日現在で，5996である。）このカードの記録を一つ一つ吟味し，さらに，安定所の雇用主訪問記録カードを参照して，第一に，適職種のありそうな事業所を選び出した。

第二に，この選び出した事業所の各々につき，事業所の作業内容を吟味し，そこに精薄のために適する職種の有無を検討し，（この場合当然作業環境条件も考慮した）さらに，第三に進んで，精薄に対する雇用主の認識や関心の度合，雇用意志の有無，雇用した場合の待遇条件などにつき調査したのである。

方法としては，第一の選び出しには，カード中から，この目的に必要な要点を抜き出して，別に，事業所単位のカードをつくり，同時に精薄に適する職場の有無をも推定しながら，整理選別するようにした。第二，第三については，直接に訪問しての調査，質問紙によるアンケート法を併用した。

この際，適当な職場か否かの判別に際しては，狩野広之（精神薄弱者の職業適性）の精薄者の作業可能範囲一覧表と，私が，札幌養護学校（北村利夫校長，この調査主任山貫義彦教諭）の協力を得て行った日本全国の精薄養護学校卒業者の就職種目とを参考にして，基準をつくり，これにより選別を行った。

調　査　結　果

表Ⅰに記したように，257の事業所の一つ一つにつき，作業内容およびそこの経営主体，人的・物的環境条件を吟味綜合した結果，事業所として119（46㌫）が，すぐにでも就職可能であり，また精薄に適当な職場を有していることが判明した。（これを第Ⅰ種と分類した。）

この各事業所は，事業所の異るにつれ作業内容による職場も異り，また，雇用可能な人員数も異ってくるが，各事業所を平均して，最小2人ずつにはなるので，約250人の精薄が，すぐにでも就職可能な場を持っていると結論づけられる。

第Ⅱ種とした68（26㌫）の事業所も，就職可能性の高い事業所で，ここでもすくなくとも100名が，就職可能性をもつ。

第Ⅲ種は，現在のままでは，就職可能性はないけれども，経営者を啓蒙し，そこの職場の環境条件に工夫を加えて変更して貰えば，決して絶望的ではなく，すくなく

表Ⅰ

業種別 ＼ 種別	第Ⅰ種	第Ⅱ種	第Ⅲ種	計
左官業	2	1	1	4
食品製造業	6	12	5	23
繊維工業	1	1	1	3
繊維製品製造業	1	—	—	1
木材，木製品製造業	15	4	6	25
家具，装備品製造業	25	10	14	49
パルプ，紙，紙加工品製造業	9	2	4	15
出版印刷業	12	4	4	20
化学関係工業	—	—	2	2
ゴム製品製造業	1	1	2	4
皮製品製造業	2	—	—	2
窯業土石製品製造業	11	3	1	15
鉄鋼業	2	1	—	3
金属製品製造業	9	8	9	26
機械製造業	2	2	6	10
畳製造業	7	5	2	14
陸運業	7	7	9	23
クリーニング業	7	7	4	18
合計	119 (46%)	68 (26%)	70 (27%)	257 (100%)

表Ⅰ「調査結果は，まず第一に，既に前述したように職安の事業所調査カードと雇用主訪問記録カードを資料として，精薄の適職種のありそうな事業所を705選び出した。第二に，この705の事業所の個々について，その事業所の作業種目，作業内容を吟味し，適当職種の有無，また適当職種がある場合，精薄者を雇用するか否か，雇用する場合の待遇，さらに，雇用主の精薄に対する認識の度合（〝精薄〟ということを知っているか否か，精薄児が，特殊教育を受けているのを知っているか否か，特殊教育を受けたものが社会的に自立している実例を知っているか否か等々）等について調べた。その結果，最終的には，257の事業所について，個々に，調べることができた。その結果を業種別に示したのが，表Ⅰである。

表中，第Ⅰ種とは，適職作業種があり，今すぐにでも，精薄者を雇用してよいと考えている事業所である。第Ⅱ種は，適職作業種はあるが，今すぐには，雇用できそうもないが，いずれ可能である事業所である。第Ⅲ種は，実際に適職作業種がなかったり，あっても雇用主の協力性，精薄に対する認識，関心の度合が低い等々で，どうも，精薄者には適当な職場ではなさそうな事業所である。」

とも，この半数で，精薄の就職は可能になると思われるものである。

なお，煩を避けて，この要約からは省いたが，以上の257の外に，未だ，札幌郊外に酪農や野菜を主とする農家もあり，この方にも，精薄就職の可能性は当然，予想されたのである。

以上の結果から，最少限約200人，おそらくは300人の精薄が，今すぐにでも，就職可能の職場が，精薄に活用されずに見過されているといえるのである。

翻って，実際に特殊教育の中学校課程を終えて，社会に巣立つ精薄者の数は，本年度札幌市では，合計しても50名に満たない。しかも，この中には，どこにも就職するのは無理と思われる重症なものも若干含まれている。

精薄者の就職に当っては，待遇条件，環境の物的条件（ことに，安全性）も当然考慮されなければならないが，何よりも，所謂人間関係，職場をつくり上げている仲間や直接の指導者などの組織とそのつくり上げている仲間の雰囲気が重要であり，併せて，将来の生活への予測も重く考慮されなければならない。

現在のように，次第に人手不足の方向に進む労働市場の傾向が，今後も強まれば，なおさらであるが，そうでなくとも上記のように精薄の職場は，現在の社会組織，経営組織の中でも，そう窮屈ではないことが，以上の調査からもいえると思う。

もちろん，国家としても，地方自治体としても，もっと計画的に，精薄対策がすすめられ，職業指導所や米国などでみられる厖護授産所（Sheltered Workshop）の如きものが，十分多数に組織づけられ，制度化されることが望ましいが，現在のままでも，特殊教育の目的地は，そう閉鎖されているわけではないことが，結論づけられるのである。

（ＩＱ 40～30以下で，特殊教育の対象に入り難い精薄については，また別な考慮を要することはいうまでもないが，これは，また別な考察を必要としよう。）（文献：省略）

第一種の中の事例をいくつか簡単に述べてみる。

事例（Ⅰ） Ｔ木材ＫＫ（木材，木製品製造業）

資本金200万円，雇用者14名，うち女子2名の製材工場である。精薄の適職作業内容は，製材の小運搬，長さ分け，結束作業である。男女何人かを，通勤で，ためしに雇ってみたいと述べているが，賃金については，他のものより能率が劣れば，多少切り下げることを条件にしている。精薄についての認識の度合も良好である。（専務取締役）

事例（Ⅱ） Ｎ紙器工業ＫＫ（パルプ，紙，紙加工品製造業）

資本金100万円，雇用者14名，うち女子9名の紙器，紙箱製作工場である。作業内容は男子の場合は，平止め（紙箱製作工程），機械止め作業，女子の場合は，函の蓋かけ，函貼り，結束作業である。男女何人か，通勤で今までに雇用経験はないが，ぜひ雇ってみたいと述べている。待遇については，他のものと変りなく仕事ができれば全く同等にすることを条件にしている。精薄に対する認識の度合も良好で，毎年一回催されている，特殊教育の成果ともいうべき，〝ちえおくれの子供たちの作品展示会〟をもみており，その関心の度合も高い。（総務部長）

彙報2 紀要総目次（第1号～第10号）

第1号

教育計画研究室「北海道の教育現況とその問題点」
山本晋・城戸幡太郎「理科学力の調査に現われた北海道の特殊性」
菊野正隆「生理現象の変動率――教育衛生学序説――」
佐々木隆介「北海道における地方教育委員会選挙に際しての世論調査の結果について」
砂沢喜代次「高校教育の改革試論――総合開発計画の再検討に立って――」

第2号

城戸幡太郎「教育段階における高等学校の地位の研究――第一次報告――」
佐々木隆介「北海道の農業協同組合諸活動における教育文化事業の地位とその振興に関する一研究――酪農教育活動の展開――」
芳賀守雄「北海道教育史――資料解題――」
籠山京「北海道生活文化圏の研究（総括報告）――地域の類型化――」

第3号

奥田三郎「問題児の社会的予告」
伊藤博「漁村における小中学生の生活構造の拡がりに関する研究」
城戸幡太郎「教育段階における高等学校の地位の研究（第2次報告）」
高等学校の教育問題に関する調査資料
1 石井茂「定時制高校生徒の労働と学習――炭鉱地域の定時制高校調査を中心として――」
2 片山晋次「定時制高校生徒の生活と体育」
3 成島喜美子「女子教育の問題」
4 皆川澄夫「女子体育の問題」
5 高橋正美「一般社会教科書の分析研究」

第4号

城戸幡太郎「教育段階における高等学校の地位の研究・第三次報告――第二次報告の補遺として――」
　第一部　生徒の進路から見た高等学校教育の問題点
　第二部　学生の教職課程履修の態度から見た高等学校教員養成の問題点
石原孝一・石井茂「炭鉱地帯の青少年の生活と教育」
奈良岡健三「適正運動量に関する研究――ペドメーターによる運動量の測定を主として――」

第5号

留岡清男「村づくりと人」

第6号

奈良岡健三「体育の科学的基礎」

第7号

砂沢喜代次「教授―学習課程の構造分析」
砂沢喜代次・鈴木秀一「授業調査――授業の構造と教師の指導性――」

第8号

市川昭午「戦時教育政策の特質と教育科学の理論――教育政策におけるリアリズム――」
斎藤秋男・小林文男「中国社会主義教育の内部矛盾と農業中学」
東正「精薄児群ＷＩＳＣ資料の分析的研究――特に，精薄児ＷＩＳＣパターンの検討を中心として――」
和田完「シャーマンの憑意行動――方法論――」
佐々木隆介「北海道の中・高校・公民館等における産業図書利用に関する調査」
石原孝一・松崎粂太郎「産業設備の更新にともなう労働力の質的変化」
産業教育研究施設（留岡清男・布施鉄治・鈴木秀一）「農業の近代化と農民の生産意欲（第1報告）――農業未共同グループと共同化グループの比較研究――」
彙報（大学院修士論文要約）
　竹田正直「プロレタリアートの独裁と過渡期の教育――ソ連の労農（ラブファーク）予備校による近代教育理念超克の過程――」
　馬場雄二「運動性要因及び緊張要因の知覚に及ぼす影響」

第9号

石原孝一「技術革新と企業内教育――事例調査を中心として――」
関谷耕一「交替制労働システムにおける労働者の余暇生活の構造――Ｔ製紙工場従業員家族の調査報告――」
佐々木隆介「北海道の産業振興とマス・コミュニケーシ

ョン――八雲町大新青年学級の場合について――」
三宅和夫・東正「幼児のＷＩＳＣ検査にあらわれた性差についての研究」
黒田孝郎「北海道における学力検査についての解析――その１　市町村別得点――」
大学院修士論文要約
抽木馥「精神薄弱児の言語障害の診断ならびに分類の試み」
安栄鉄男「学生生徒ならびに運動選手の呼吸循環系機能に関する実験的研究」

第10号

鈴木英一「戦後日本の教育改革思想――とくに自由主義的知識人の戦前教育批判とその形成基盤について――」
黒田孝郎「北海道における学力検査についての解析――その２　学校別得点――」
北島象司「知覚統合過程による知能の研究――知覚における情報処理過程の微視発生的分析によって知能構造を解明する試み――」
東正「コロンビア精神成熟尺度の妥当性に関する研究」
彙報１　大学院修士論文要約
小山毅「明治初期の国民教化策についての考察」
広川和市「"典型"分析の視点と方法――比較教育の観点から――」
島尾朝児「授業の構造にかんする一考察――ソ連邦リーペック州・市における教育経験に学びながら――」
末岡一泊「精神薄弱児の職場開拓に関する調査研究」
彙報２　紀要総目次　（第１号～第10号）